

act

art,
culture,
tradition

28

[発行] 札幌市教育文化会館
アクト第28号

人形劇の衣装。



人形の衣装製作

舞台上で命を吹き込まれ、観客を物語の世界に引き込む人形たち。その造形において、衣装は重要な役割を担う要素の一つと言えるでしょう。人間の衣装と違い、人が遣う人形ならではの仕上がりを求められる人形衣装を製作する上で、札幌の劇場や美術家から頼りにされているのが、安尻美代子さん。遣い手として人形劇に携わってきた経験を元に、美術家のデザインを立体化し、演者が使いやすいよう工夫を凝らす…そんな人形衣装製作の舞台裏を拝見。

Photo : Hiroo Takatsu [STUDIO TAKE 2]



ある日本人の、ロシアを舞台とした
冒険譚を彩る人形衣装。

さっぽろ人形浄瑠璃芝居あしり座『大黒屋光太夫ロシア漂流記』より

2018年2月に3段目『シベリア縦断の段』が発表され、話題を呼んだ人形浄瑠璃『大黒屋光太夫ロシア漂流記』。時は江戸時代。ロシア領の島に漂着した大黒屋光太夫たち日本人一行が、さまざまな苦難の末に国へ帰るまでを描く史実を元にした物語は、さっぽろ人形浄瑠璃芝居あしり座による初のオリジナル演目です。演出を西川古柳さん(八王子車人形西川古柳座 五代目家元)、脚本を竹本信乃太夫さん、節付を鶴澤弥栄さん、美術を沢則行さんが担当。人形衣装製作は、安尻美代子さんと藤田直子さん。これまで数多の浄瑠璃作品が世に出てきましたが、ロシアの宮廷衣装を着こなす浄瑠璃人形には、本作でしか出会えません。

劇場が私を鍛えてくれたのだと思います。

人形劇との関わりは、札幌市こどもの劇場やまびこ座の「初心者のための人形劇講座」を受講したことがきっかけです。その時の講座では3つの劇団(※1)ができて、私はその中の「人形劇団ぽっけ」で今も活動を続けています。講座終了後、しばらくしてから劇場プロデュースの人形劇で衣装関係を手伝うようになり、沢さん(※2)が札幌で制作する作品の衣装も手伝うようになり、いつの間にか今に至ります。人形劇をする人は人形衣装も自分たちで作りますので、そんなに難しいことをしている感覚はないのですが、演劇など人の衣装を作る方や洋裁をする方からは「難しい」と言われます。私は人形の仕組みや遣い手の気持ちが多少なりともわかるので、そこは役立っているかもしれませんね。ただ、私もやりながら覚えていった感じですよ。劇場が私を鍛えてくれたのだと思います。

『大黒屋光太夫ロシア漂流記』の衣装製作のお話が来た時は、まず浄瑠璃の人形に衣装を着せることが自分にとって初でしたし、「人形に洋服を着せるんですか？それを作るんですか？」って、二度驚きました(笑)。浄瑠璃の人形はもともと和服を着る人形で、洋服を着せる身体じゃないんです。例えば人形にベストを着せるには、まずキルティングで土台となる身体を作って、その上にベストの布を縫い付けるというように、見えな

いところの工夫が必要で。最初はそういったことが全然わからないので、まず作って着せて、なんかここはおかしいぞと。そこから解決方法を考えるという繰り返しでした。極寒のロシアが舞台なので防寒着も作るのですが、人形自体が結構重いので、衣装にあまり重い素材は使えません。あしり座の矢吹さんと美術家の沢さんと一緒にカナリヤへ行って布選びをした時は、本当にクタクタになりました…(笑)。

私は40を過ぎてから人形劇の世界に入って、気づけばもう30年近くになります。洋裁を習っていたわけでもないですし、人形劇を始めたのはたまたまなんです。だからこそ、やれる時が来てからでも、できることっていっぱいあるんじゃないかなって思います。最近では夫から「いつも洋裁をやっている人」と思われていて、部屋にこもってひたすら製作している時は、全然声がかからない(笑)。忙しいですけど、若い人たちと一緒に物作りをできることは楽しいですね。矢吹さんや沢さんは面白いことを考えますし、制作の過程を近くで見ることのできるお得な場所に自分はいのだなあと感じます。

※1 人形劇団ぽっけ、人形劇団ボクラ、人形劇団おぼぶの3つで、現在も活動中。

※2 チェコ在住の人形劇師で、『大黒屋光太夫ロシア漂流記』の美術を担当。



PROFILE
安尻 美代子
Miyoko Ajiri

1988年に札幌市こどもの劇場やまびこ座で初心者の為の人形劇講座を受講し、同年人形劇団ぽっけを結成。2005年から劇場プロデュース人形劇の人形・役者の衣装を制作するようになる。近年手がけた主な作品は、やまびこ座・こぐま座プロデュース「北海道の人形劇シリーズPart.1「新☆アイヌ・ラックル伝」、北海道の人形劇シリーズPart.2「モイモイ・オーシャン・パラダイス」など。

衣装。人形劇の

2月に札幌市こどもの劇場やまびこ座で上演された、さっぽろ人形浄瑠璃芝居あしり座『大黒屋光太夫ロシア漂流記』で、人形の衣装を製作した安尻美代子さん。和服から洋服まで、さまざまな衣装を着た人形が登場し、観客の目を大いに楽しませてくれた本作。衣装製作の裏話を聞きに、劇場の工作室にお邪魔してきました。

act
art, culture, tradition
28

【制作過程】

美術家のデザインを立体化し、
演者が使いやすいよう工夫を凝らす。
人形の衣装製作、4つのステップ

STEP 1 寸法を測る

浄瑠璃の人形は120cmほどの背丈があるので、安尻さん曰く「子供服を作る感覚」。胴輪のサイズを測る時は、主遣いが頭の部分を持つために腕を差し込む開きも考慮。手足は曲げた状態でも採寸します。



大事なのが胴輪のサイズ。男女でもサイズが違い、例えば光太夫だと60cm。意外と、人間の大人サイズと変わらないウエストの持ち主です。

STEP 2 型紙をおこす

寸法を元に寸法書を作成し、型紙をおこします。遣い手の腕が入るよう袖は太め、人形の手を動かすための差金という長い棒を通す穴など、随所に工夫が。デザイン画には一部しか見えていない文様も、資料を参考に自身で考案し、美術家と確認しながら全体図を作成。



STEP 3 仮布で製作し、試着・直し

一番時間をかけるところが、このパート。仮布で製作したものを実際に人形に着せて、動かしてもらいながら、袖や裾の長さを調整していきます。きれいなラインを出すために縫い代を足すなど、修正した箇所は型紙も訂正しておきます。



STEP 4 本布で製作

人形の大きさにもよりますが、1着にかかる時間は平均して3日間ぐらい、刺繍が入る場合は2週間ほど。基本的に自宅での作業で、幕など大きなものを製作するときや、本番が近くなると、ミシンを劇場に持ち込んで作業することもある。



衣装の細部にズームイン！

『大黒屋光太夫ロシア漂流記』はロシアが舞台の浄瑠璃作品という意欲作。操るための仕掛けや身体の構造、衣装の仕組みが、全て和服をベースに考えられている浄瑠璃人形…が、ロシアの宮廷衣装を着る？そんな難題にチャレンジした衣装製作の過程には、たくさんの創意工夫がありました。数ある衣装の中から、安尻さんが選んだ3点をピックアップ！



大黒屋光太夫

本作の主人公。浄瑠璃の人形は通常丹前わたが入ったふわふわの着物を着ているが、今回、光太夫をはじめとする日本人一行の着物やモンペには、わたしではなくフリースを裏地として縫い付けてボリュームを出した。ちなみに2019年発表の最終段では、光太夫も正装する予定。その衣装もお楽しみに！

モンペの丈も、足を曲げた時に膝小僧の金具が隠れる長さで調整。

着物の上に洋服(コート)を着せる上で、洋服らしいバランスが崩れないよう、袖の太さを試行錯誤。

防寒着

日本人一行が州都イルクーツクへ向かう時に着ていた防寒着。本番では手袋とブーツも着用。最初は帽子と耳かけを着用する予定だったが、ちょんまげがあるためフードに。「本番を客席から見ましたが、フードをちゃんと被っているか心配でお話集中できなかった(笑)」と安尻さん。



袖は筒状に見えるが、実は下側を縫わずに開いたままになっている。

ラックスマン

光太夫がイルクーツクで出会った人物。浄瑠璃人形の胴や二の腕は空洞になっているため、宮廷衣装を着せるために、キルティングで身体の構造を作るところからスタート。腕を動かす仕掛けを洋服でいかに隠すか(和服だと、大きな袖や脇の穴を利用)、演出の西川古柳さんからもアドバイスをもらいながら形にしていた。

公演情報 | 安尻さんが衣装製作を担当！20体以上出てくる人形の衣装にご注目。

やまびこ座・こぐま座プロデュース
北海道の人形劇シリーズPart 2

『モイモイ・オーシャン・パラダイス』

【日 時】 4月28日(土) 14時～、29日(日・祝) 11時～、30日(月・振休) 11時～
【金 場】 札幌市こどもの劇場やまびこ座 (札幌市東区北27条東15丁目)
【料 金】 大人(18歳以上) / 前売 1,000円、当日 1,200円
こども(5歳以上高校生まで) / 前売 600円、当日 800円

